

社会科 「社会的事象をもとに考えを深め合いながら未来をそうぞうする子ども」  
 ～対話を通して人・もの・ことにアプローチし、よりよい社会を考える実践～

大屋 智・塩根 航平

1 社会科における未来そうぞう

本校、社会科の目指す子ども像は「社会的事象をもとに考えを深め合いながら未来をそうぞうする子ども」である。

昨年度まで価値判断・意思決定する子どもを育てるテーマのもと、子どもたちが問題解決に迫られた場面で、過去・現在・未来から、社会生活においてよりよい未来の答えを考え、追究していく姿が見られた。しかし、子どもたちが他者の意見を踏まえ、自分の考えを深めていくことが不十分であることが課題としてあげられる。そこで、本年度は、対話を重視した学習展開から、社会的事象への考えを深め合いながら問題を追究していく子どもの育成を目指して研究を進める。

社会科の探求の過程の中で「現状から解決・改善すべき問題は何か」と社会に対して疑問や問題意識をもち、「自分はどのように関わっていったらいいのか」と問題の解決策や今後の関わり方を人・もの・ことにアプローチしながら、多面的・多角的に考えることが未来そうぞう科の協働的実践力を高め、そうぞう的実践力の発揮につながると考える。

2 「未来そうぞう」と教科との関係

(1) そうぞう的実践力を発揮する姿

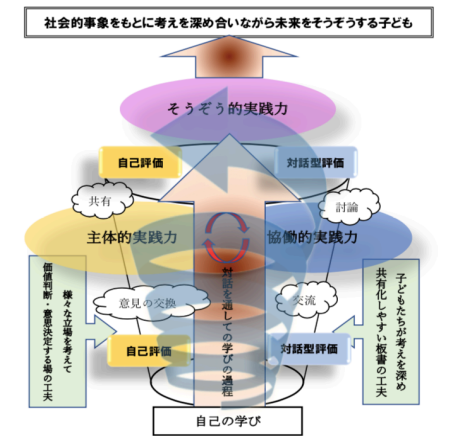
社会科は、社会的な見方・考え方を働かせて単元を構成し、課題把握、課題追究、課題解決、新たな課題を見出す、という学習過程が重要である（学習過程と対話との関係を後に記述）。このことは未来そうぞう科における主体的実践力と協働的実践力を往還させながらそうぞう的実践力を育てていく姿と重なり合うと考える。そこで、第3学年～第6学年までの過程の中で、社会科で未来そうぞう科の資質・能力を発揮する姿を以下の表1にまとめた。

表1 【社会的事象をもとに考えを深め合いながら未来をそうぞうする子ども】

【そうぞう的実践力につながる姿】	
○社会的事象について協働しながら多面的・多角的に調べ、考えたことをもとによりよい未来や社会の在り方を表現・実践する姿 ・協働しながら多くの資料を調べたり、問題の本質に迫るような対話をしたりすることから新たな考えを導き出し、学習活動で表現したり、実生活に生かそうとしたりする姿。	
【主体的実践力につながる姿】	【協働的実践力につながる姿】
○社会的事象に対して見通しをもって、進んで調べたり、考えたりしながら、自分なりに学びを広げたり深めたりし続ける姿 ・社会的事象との出会いや振り返りの場面で、関心、疑問や問題意識をもち、資料活用や問題解決に向けて取り組んでいる姿	○それぞれが自力解決して出した答えをもとに、様々な集団の中で対話を通して、協働し、社会的事象について多面的・多角的な思考をする姿 ・社会的事象を多面的・多角的に捉えるため、他者・資料・教材など様々な対話の方法を活用している姿

子どもたちの興味・関心のある教材から人・もの・ことにアプローチしながら自分なりに学びを広げ、深めることで主体的実践力を高める。さらに教材との対話や他者との対話、とくに、意見の交換や交流、討論や考えの全体共有など、対話を通じた学びの過程をもとに追究することで、協働的実践力を高め、社会的事象について多面的・多角的に考えられるようにする。

そして、未来そうぞうの主体的実践力と協働的実践力を発揮する場面の往還の中で、社会的事象について価値判断・意思決定し、共有し合うことで考えを深め合うことができると考える。そして、考えたことを振り返る際には、自己評価力を高めたり、対話型評価を織り交ぜたりすることで、社会的事象に対しての自分の考えや立場を考えていくことができると考える。そのように学習を進めることで、よりよい未来や社会の在り方を考えられるようなそうぞう的実践力を発揮する。



構造図 社会科と未来そうぞう科で育む資質と能力の関係

(2) 協働的実践力を高め、そうぞう的実践力を発揮するための手立て

社会科の特性を生かして、社会的事象や問題を内省的に思考し、さらに他者（人）、教材（もの、こと）と対話しながら考えを思考することで協働的実践力を高め、多面的・多角的に思考するそうぞう的実践力の発揮につなげる。そのための手立てを以下に示す。

①対話を通じた学びを重視した授業づくり

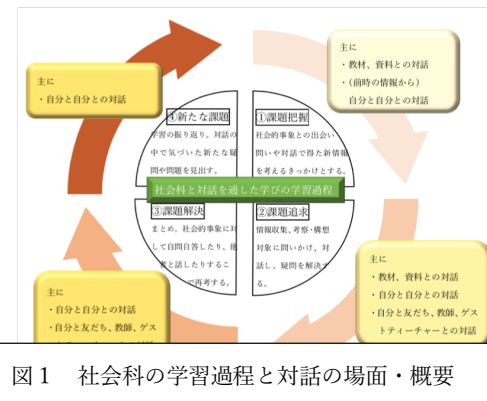
本校社会科において、「社会的事象の事実や認識を根拠にしながらかし合うこと」「社会的事象の問題を多面的・多角的に話し合いながら分析し、その解決策などを表現し合い思考を深めること」を対話として考えている。

そして、本研究では表2に示すものを対話の場面と概要とし、学習の様々な場面で重点的に組み込むことで、協働的実践力を発揮していく。表2のように、自己内対話は、教材や資料をもとに、自分と自分との対話をしながら思考するものと捉えている。また、自己外対話で自分と友だち、教師、地域の人やゲストティーチャー、教材・資料との対話は知識や情報を蓄積することから、そこから新たに再考することと捉えている。自己外対話と自己内対話を繰り返しながら、「始めは○○と考えていたが今は考えが変わった」「○○という考え方や立場があるんだね、それには賛成だね」など、対話を通して多面的・多角的に思考し、考えを深めるようにする。

表2 【対話の場面と概要】

場面	概要
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分と自分との対話</li> <li>・教材、資料との対話</li> </ul>	<p><b>自己内対話</b></p> <p>主として、内省的な思考を伴う活動。見学や調査、資料活用によって自力解決し、新たな情報を得たり、発想したりする。</p> <p>自己外対話による自分の考えを、さらに深めていく。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分と友だちとの対話</li> <li>・自分と教師との対話</li> <li>・自分と地域の人やゲストティーチャーなどの対話</li> </ul>	<p><b>自己外対話</b></p> <p>主として他者から情報を得る。他者の情報から、比較・分類・総合・関連付けなどをしながら再考する。</p>

そして、表2の場面を学習過程の中で組み込んでいく(図1)。対話を通して考えを深め合う学習過程を①問いや対話で得た新情報を考えるきっかけとする、②社会的事象に問いかけ、対話し、疑問を解決する、③社会的事象に対して自問自答したり、他者と話したりすることで再考する、④対話の中で気づいた新たな疑問や問題を見出す、という流れで、どの過程を重視し、対話の工夫するのか考えながら進めていく。



①の場面では、子どもたちが対話をしたくなるような教材を用い、社会的事象と出会いを設定する。そのため、教材や資料には身近な感覚、驚きや違和感、切実感のあるものを用いることで、課題設定や見通し、予想を対話しながら考えるようにする。

②の場面では、副読本や書籍、ICTなどの教材や資料を活用しながら調べる(教材・資料・自分との対話)。また、ゲストティーチャーなど、人の話からも情報を得ながら調べる。そして、社会的事象を様々な視点から調べた上で、意見交換や交流、共有する。ペアでは、お互いの考えを、ノートなどを活用し、相手の考えを聞いたり、質問したりしながら自分自身の考えを深める。グループでは、お互いの考えを、ホワイトボードなどを活用し、考えを広めたり、合意形成したりしながら考えを深めていく。

③の場面では、学級全体の中で、共有したり、場合によっては討論をしたりしながら、問題を追究し、社会的事象への考えを深め合う。その際、①や②で知った情報をもとに事実や認識を根拠にしながら話し合ったり、多面的・多角的に分析したりしながら話し合いを進められるようにする。

④では、ふりかえりをもとに本時の学びを話し合い、次時への見通しや新たな疑問や

話し合う場を設定する。また、教科ノート(本校独自の本日の教科の学びをノートにまとめる宿題)の意欲づけにもつながるようにすることで、学びをさらに深いものにしていく。

これらの学習過程を繰り返すことにより、多面的・多角的に協働的実践力を高めながら、そうぞう的実践力の発揮へとつなげていく。

②様々な立場を考えて、価値判断・意思決定する場を工夫する。

資料をもとに様々な立場から価値判断・意思決定する場面を学習過程の中で取り入れていく。「どうしたらよいか」「どうあるべきか」「AかB、どちらかよいか」など、社会問題に対して選択・判断できる場を設定することで、よりよい未来や社会の在り方を追究できるようにする。

また、選択・判断するには、何を価値判断するのか、明確にする必要がある。そこで、教師が子どもたちの思考と社会問題を踏まえて、切実感のある論題・問いを設定する必要がある。そこで論題・問いを①社会科の学習として話し合う価値があるのかどうか否か判断する、②子どもの判断が分かれる論題・問いか否かを判断すること、③社会問題に対して友だちと対話しながら、新しいものを考え、生み出すことができる論題・問い、という視点で設定していくことで、社会問題を身近に、切実感を感じながら話し合えるようにする。

③子どもたちが考えを深め、共有しやすい板書の工夫

話し合いによる対話は内容が広がり、深まっていくと、それらを整理しながら考えをまとめる必要がある。発言内容を整理することで思考は整理される。意見を全体共有する場では、子どもたちは「今話していること」「過去に話していたこと」「次の考えを発想すること」と同時に思考を巡らせながら学習を進めている。

そこで教師は、発言をわかりやすくまとめたり、比較・分類・総合・関連付けたりしながら、板書を構造化しながら、対話が深まるよう指導していく。

3 社会科における評価について

未来そうぞう科と社会科のつながりでは、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力など」「主体的に取り組む態度」という新しい指導要領における3つの観点の評価を基盤として、未来そうぞう科の3つの実践力を見取るものとする。

(1) 対話型評価による自己評価力の育成と教師の見取り

毎時間の授業後にふりかえりを書くようにしている。本時で学んだこと、学びから気づいたこと、感じたことを書くことで子どもたちは自分の学びを見つめ直すようにする。また、どのように振り返れば良いか、ふりかえりの視点をあたえることで、新たな疑問や問題も書くようにする。

そして、それらを座席表にし、子どもたちに配布し、全体共有する。そこで、子どもたち同士が、相対的に評価し合うことで、他者との学習したことの感じ方を比較し、対

話の中で社会的事象に対して新たに価値や意味を見出しながら、自己評価力を高めていく。

その際、教師は、子どもたちの記述を価値づけたり、意味づけたり、社会的事象と関連づけたりすることで、子どもたちの自己評価の一助となるように支援していく。また、教師は子どもの思考の変容や態度の変容を見とることで、子どもの思考の流れを考えた指導にも生かす。

**【参考文献・引用文献】**

文部科学省『小学校学習指導要領』（2017年3月告示）

安野功『社会科授業が対話型になっていますか』（2013年）

北俊夫『主体的・対話的で深い学びを実現する社会科授業づくり』（2018年）

安野功・加藤寿朗・中田正弘・石井正広・唐木清志・児玉大祐・小倉勝登『小学校 新学習指導要領 ポイント総整理』（2018年）